

【 復活トロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより  
 恵深主爾高

くだり、みっかのほうむりをうけて、  
 降三日葬受

われらをくるしみよりときたまえり、  
 我等苦釋給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう  
 我生命復活主光

えいはなんぢにきす。  
 榮爾歸

【 顯榮祭のトロパリ 第7調 】

ハリストスカみよ、なんぢはやまにおいてへえん  
 神爾山於變

ようして、なんぢのもんとにそのちからにか  
 容爾門徒其力か稱

ないてなんぢのこうえいをあらわしたま  
 爾光榮顯給

えり。ねがわくはしょうしんぢよのきとうによ  
 願生神女祈禱因

りて、われらつみなるものにもなんぢのえ  
 我等罪者爾永

いざいのひかりはかがやかん。ひかりをほど  
 在光輝光施

こすしゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 ぢに 歸 す。

【 復活のコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。  
光 榮 父 子 聖 神 歸

だいじんじなるしゅよ、なんぢははかよりふく  
大 仁 慈 主 爾 墓 復

かつして、しせしものをおこし、ア  
活 死 者 お 興

ダムをふくかつせしめたまえり。エヴァはなん  
復 活 給 ま え り 。 エ ヴ ア は なん 爾

ぢのふくかつをたのしみ、せかいのはて  
復 活 樂 し み 、 世 界 は て

はなんぢがしよりおきたるをいわう。  
爾 死 お 興 を い わ う。

【 顯榮祭のコンダク 第7調 】

いまもいつうもよよにい、アミン。  
今 何 時 よ よ に い 、 ア ミ ン。

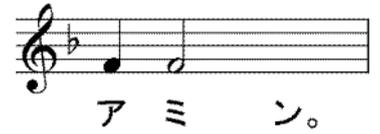
ハリストスかみよ、なんぢがやまにおいてへんよう  
神 爾 山 お 於 變 容

せしとき、なんぢのものとはいるるにかな  
時 爾 門 徒 容 稱

いて なんぢのこうえいを見たり、此  
 れなんぢのじゅうじかにていせらるるを見、  
 くるしみのじゆうなるをさとり、なんぢが  
 苦しみのじゆうなるをさとり、なんぢが  
 じつにちちのこうえいなるをせかいつた  
 えんためなり。

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い しん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ な よ</sup>主の名に依りて來たる者<sup>き</sup>は崇<sup>もの</sup>め讃<sup>あが</sup>めらる、ヘルヴィムに座<sup>ぎ</sup>する者よ、爾<sup>もの</sup>は其國<sup>なんち</sup> <sup>そのくに</sup>  
 の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の寶座<sup>ほうざ</sup>に在<sup>あ</sup>りて恒<sup>つね</sup>に崇<sup>あが</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらる、今<sup>いま</sup>も何時<sup>いつ</sup>も世<sup>よよ</sup>世<sup>よよ</sup>に、 )

【 <sup>プロキメン</sup> 提綱 主日第8調 】

司祭) <sup>つつし</sup>慎<sup>き</sup>みて聽<sup>しゅうじん</sup>くべし、衆<sup>へいあん</sup>人に平安、

誦經) <sup>なんち</sup>爾<sup>しん</sup>の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>しゅなんぢら</sup>プロキメン、主<sup>かみ</sup>爾<sup>ちかい</sup>等の神に誓<sup>な</sup>を作<sup>つぐの</sup>して償<sup>えよ</sup>えよ、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つ ぐ の  
 主 爾 等 神 誓 作 償  
 え よ 、

誦經) <sup>かみ</sup>神はイウデヤに知られ、<sup>し</sup>其名<sup>そのな</sup>はイスライリに <sup>おお</sup>大なり、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つ ぐ の  
 主 爾 等 神 誓 作 償  
 え よ 、

誦經) <sup>しゅなんぢら</sup>主<sup>かみ</sup>爾<sup>かみ</sup>等の神に

ち か い を な して つ ぐ の え よ 、  
 誓 作 償

【 アポστόロス 使徒經 128 端 コリント前書 3 章 9 節～17 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我等は神の同勞者なり、爾等は神の耕えす所の田、神の建つ所の屋

なり。我は神より我に與えられし恩寵に循いて、智なる工師の如く基を置けり、他人

は其上に建つ、然れども各如何に建つかを慎め。蓋置かれたる基なるイイススハ

リストスの外、誰も他の基を置く能わず。人若し斯の基の上に金、銀、寶石、木、草、

稗を以て建てば、各人の工は顯れん、夫の日は之を表さんとすればなり、蓋火に因り

て明ならん、火は各人の工の如何なるを試みん。若し人の建てし所の工存せば、値

を得ん。若し其工焚けば、損を受けん、然れども己は火より脱るるが如く救われん。爾

等豈知らずや爾等は神の殿にして、神の神爾等の中に居ることを。若し人神の殿を

毀たば、神は彼を毀たん、蓋神の殿は聖なり、此の殿は爾等なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしたちは神の同勞者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である。神から賜わった恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういうふう建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事はどんなものであるかを、ためすであろう。もしある人の建てた仕事そのまま残れば、その人は報酬を受けるが、その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう。あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

ア リル イ ヤ、 アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>きた しゅ うた かみわ すくい かため よ</sup> 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、

ア リル イ ヤ、 アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ</sup> 讚揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、

ア リル イ ヤ、 アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思

<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ</sup> を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし</sup> よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

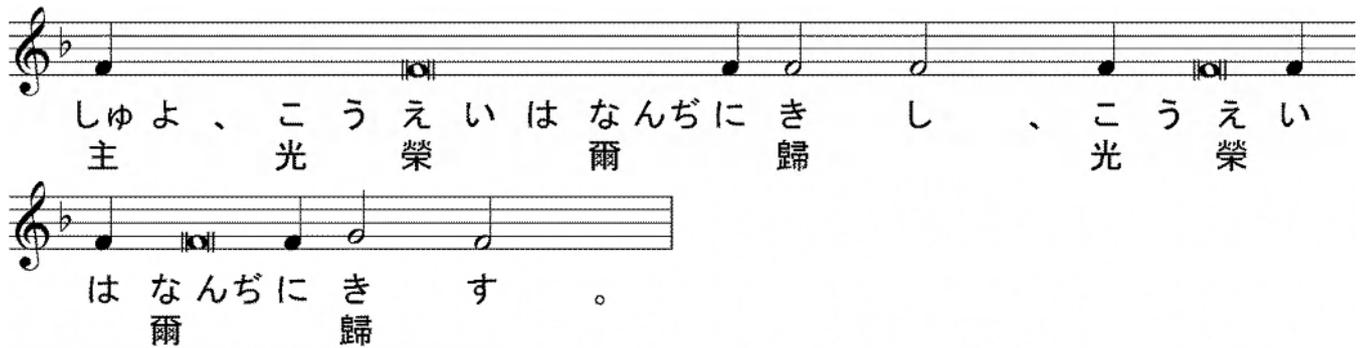
<sup>ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 59 端 14 章 22～34 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス 其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去ら

しむる間に、己に先だちて、彼の岸に往かしめたり。民を去らしめて後、彼は獨處に於

て祈禱せん爲に山に登り、既に暮れて、獨彼處に在りき。時に舟海の中に在りて、浪

に撼られたり、風の逆いし故なり。夜四更の時、イイス海を履みて彼等に往けり。門徒其

海を履むを見て、驚きて曰えり、是れ怪物なり、乃懼に由りて呼べり。然れどもイイ

ス直に彼等に語りて曰えり、心を安んぜよ、是れ我なり懼るる勿れ。ペトル彼に答

えて曰えり、主よ、若し是れ爾ならば、我に水を履みて爾に至らんことを命ぜよ。彼曰

えり、來れ、ペトル舟を下り、水を履みて、イイスの許に往けり。然れども風の烈しき

を見て、懼れ、溺れんとして、呼びて曰えり、主よ、我を救え。イイス直に手を伸べて、

之を援けて曰く、小信の者よ、何ぞ疑いたる。共に舟に登るに迨びて、風息みた

り。舟に在る者就きて、彼を拜して曰えり、爾は誠に神の子なり。既に濟りて、ゲン

ニサレトの地に來れり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

その時、イエスは弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。そして群衆を解散させ

てから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われた。するとペテロが答えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」。ふたりが舟に乗り込むと、風はやんでしまった。舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。それから、彼らは海を渡ってゲネサレの地に着いた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮  
 はなんぢにきす。

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ